

「家族みたい」な学校

—— ムンバイ日本人学校での実践から ——

前ムンバイ日本人学校 校長

大阪府東大阪市立長瀬西小学校 校長 武 井 論

キーワード：日本人学校，危機管理，教育環境の整備，現地理解教育，児童生徒の様子

1. はじめに

赴任校が「インド・ボンベイ日本人学校」。こう連絡があったとき、その後、おとずれる様々な課題に対しどれほどの覚悟があっただろうか。もちろん、赴任先がどこであろうと行こうという気持ちに変わりはないし、「世界で活躍できる人材の育成」を胸に学校経営を行うという決心に揺るぎはなかった。しかしながら、インドに到着し現実に実務が始まると、次から次へと降りかかってくる課題に、その覚悟がいかに脆弱であったか思い知らされることになる。

ただ、数々の無理難題に直面しつつも、こうして充実した思いで実践を記すことができるのは、そこで出会った素晴らしい子ども達、保護者・在留邦人の皆様、連日遅くまで残って頑張ってくれた教職員・現地スタッフ、そして家族がいてくれたからこそである。インドで出会ったすべての人々への感謝をこめて、3年間をまとめたと思う。

2. インド到着、そして…

平成23（2011）年3月10日、インド・ムンバイ到着。翌3月11日、宿泊先のホテルのテレビから流れる日本の光景は、目を覆いたくなるような惨状－東日本大震災－の映像であった。逃げ惑う人々、車、容赦なく押し寄せる津波。そんな日本での大災害に心を痛めながら、ボンベイ日本人学校での3年間は、40年ぶりの校舎移転という大事業から始まった。

ムンバイ市北部アンデリー地区という商業地域にある新校舎は、オフィス仕様に建てられた未入居ビルだった。遊び場は、わずかに駐車場兼用のスペースがあるだけだ。プールもない。オフィスとして活用されるべきスペースを、教室サイズに間仕切りをして校舎に改築したものだ。

黒板取り付け作業や机椅子の搬入といった校舎内の整備、電話・ネット回線の取り付け作業、子ども達のスクールバス巡回経路の変更、体育授業に借用するグラウンドやプールの手配、震災による日本からの送付物資の遅れ、等々。こうした次々と起こる事態に直面しながらも、何とか処理を続けた当時の教員は、「とにかく子ども達のために授業をせねば」という一心であった。

追い打ちをかけるように、平成23（2011）年7月13日夜、「ムンバイ市内3か所で爆弾による同時多発テロ発生」のニュースが飛び込んできた。邦人の犠牲者はいなかったものの、百数十名以上の死傷者があり、すぐに学校を臨時休校にした。2008年に大規模なテロ事件が起こったこともあり、極度の緊張の中、運営委員長、総領事館、文科省と何度も連絡を取り合い、休校期間と再開時期について対応を協議した。

6月になると、「モンスーン」と呼ばれる雨季が始まった。ムンバイでの雨季は、時折バケツをひっくり返したような猛烈な雨が降り、道路の冠水や街路樹が倒れたりする。児童生徒の安全確保のため、下校時刻を早めたり臨時休校したりすることもしょっちゅうであった。

こうしたテロや急な天候の変化に対する危機管理意識は、着任3か月で文字通り叩き込まれることになった。また、総領事館や日本人会、更には現地校などからも広く情報を集め、避難訓練などを日常的に行い緊急事態に備える、といった姿勢が、海外で暮らす派遣教員には絶対に欠かすことの出来ないものであることも学んだ。

テロ、洪水、猫の額のような遊び場…。普通に日本に暮らしていればまず経験することのない厳しい状況の中



でも、子ども達は本当に明るく、健気であった。平成23(2011)年5月9日(日)、在ムンバイ日本国総領事、日本人会長、学校運営委員長、歴代運営委員、保護者、日本人会の各皆様をお招きし、「新校舎移転を祝う会(←写真)」を盛大に行った。式典後、皆で放った風船がインドの空のかなたに飛んでいく光景は、きっと子ども達の心にも深く刻まれたことであろう。

3. 教職員の確保と教育課程の整備

本校は小規模校であるため、中学部だけでなく小学部も教科担任制である。従って小学校出身・中学校出身に関係なく、教員はいずれかの教科担当として、児童生徒ほぼ全員に関わることになる。校長である自分も、もちろん授業を受け持った。

平成23(2011)年度当初、児童生徒数26名(派遣教員6名)だったのが、翌2012年度、日系企業のインド進出を機に児童生徒数が増加し、在籍児童生徒が小中全9学年に及ぶこととなった。すると、それまでの教員6名体制では、授業を展開することが出来ない。どうしても新たに教員が必要である。そこで、他の日本人学校に倣って、日本人会の皆さんに呼びかけ、「ボランティア講師」を活用するとともに、移転時から支援していただいた運営委員会の働きかけも相まって、学校予算で「常勤講師」を採用することが決まった。

こうして教員7名が確保されたことに加え、本校に長く勤務してくれているインド人現地採用講師、更には派遣教員の配偶者講師、日本人会のボランティア講師による指導体制が確立した。それでも9学年の授業を展開するには、一部、複式学級にしなければならなかった。そこで、音楽・体育・図工(美術)といった実技を伴う教科に加え、新たに小学部の国語科・算数科の一部を「演習(=チャレンジ)」の時間として複式化する教育課程の整備を行った。また、始業時までの時間を有効に活用するため、「朝の学習」「朝の読書」、そして運動不足になりがちな生活への懸念から「朝マラソン(平成25年度からは「朝ヨガ」)」を取り入れることにした。

こうした一連の取り組みが功を奏してか、平成25(2013)年度には、ついに政府派遣教員が1名増員された。その他、現地インドでの法人格の取得、校名の変更(「ボンベイ日本人学校」→「ムンバイ日本人学校」)、新型バスの購入等々、学校を取り巻く教育環境の整備は、運営委員会、日本人会、保護者、そして総領事館の皆さんのご尽力なしには到底なしえなかった。深い感謝の念とともに、このことを記しておきたい。

4. インドを知り、インドを語れる子に

毎年実施する保護者向けアンケート「学校評価」において、現地理解教育を望む声は強い。保護者の中にも「せっかくインドに来たのだから…」という思いがあり、日頃、なかなか接することにできないインドに触れ、インドを理解して欲しいという願いは、教員にも共通している。そんな願いに応えるため、様々な取り組みを行っているが、中でも子ども達が最も楽しみにしている行事は、「野外活動」と「修学旅行」である。

「野外活動」は参加児童最高学年の4年生にとっては、重要な役目を任される行事である。4年生のリーダーを中心に、1~3年生までの子ども達をまとめなければならない。生活ルール、食事の配膳、集合時の整列、移動中の班員の把握、等々、リーダーがしなければならないことが次から次へと求められる。対象学年が低学年であることに配慮して、毎年、同じホテルを宿泊先としているので、既に参加したことにある児童は、どこに食堂があり、トイレがあるか、一応の理解をしている状況であった。4年生で編入してきた子どもはともかくとして、概ね4年生になると既に訪問した土地であるため、落ち着いた行動がとれるようになる。

目的地・ロナワラは、活気あふれる賑やかなムンバイとは違って、雄大な山脈や滝などインドに自然がたっぷりと味わえる場所である。この野外活動で子ども達が最も楽しみにしている活動が「水晶拾い」である。グループごとに山に登った後、ふもとに「水晶」が落ちている場所がある。その土地の所有者の協力もあり、子ども達

は毎年、自由に水晶を拾わせてもらっている。中にはきれいに結晶した水晶を袋いっぱい集める子もいて、家に持って帰るのだと得意顔であった。日本では見ることの出来ないデカン高原の雄大な遠景と足元の水晶を集めるといった近景が相まって、インドを満喫できる貴重な機会なのである。

「修学旅行」は、小学5年～中学3年までが、デリー、コーチン（インド南部）、チェンナイ（インド東部）の3か所をローテーションして実施している。それぞれインドを代表する街であるが、全く違った趣のある街で、インドという国の深さを感じることができる。

デリーは、首都である「ニューデリー」と「オールドデリー」から成るインドの玄関である。ムガル朝時代の世界遺産から、現代のインドを代表するエンターテイメント、街を行きかうリキシャ体験、そしてニューデリー日本人学校との交流も行った。チェンナイは、イギリス統治時代の東インド会社中継地として発展した街で、西側のムンバイとは気候も趣も全く異なった雰囲気を持つ港町である。海辺に広がる世界遺産に指定されている寺院を見学したり、チェンナイ補習授業校との交流を行ったりした。コーチンは、インド半島の先端部西南に位置する街で、ヴァスコ・ダ・ガマ最期の地としても有名である。湖を行きかう水鳥を眺めながらゆっくりとボートで湖面を進むと、ムンバイでは味わったことのない静寂の時間を過ごすことができる。実際に3か所全てを経験した生徒にとっても、コーチンが最も素晴らしいと感じる場所だったようである。

ムンバイに暮らす日本人家族は、慢性化する交通渋滞や運転マナーの悪さから、自家用車を運転することもなく、公共交通機関を利用することもほとんどない。各家庭でドライバーを雇用し、車で移動するのが一般的である。買い物に出かけるとしても、地元の市場も行くことはあるが、近年急激に発展したスーパーマーケットの方が清潔で利便性は高い。従って、日常的に子ども達が見るインドの姿は、スクールバスや自家用車の車窓からの風景や整備されたショッピングモールで見る風景に限定されてしまう。道路に散乱するゴミ、路上生活者、今にも倒れそうな小屋、小金をせびりに車の停車とともに近づいてくる人々…。初めてインドに来た子どもたちは、それまでに見たこともない風景に大きな衝撃を受ける。ムンバイは比較的治安の良い街ではあるが、彼らの第一印象は決して良くはない。

宿泊学習以外にも、インド文化を学ぶためにインドダンスを習ったり、現地校との交流行事を持ったりと、様々な取り組みを行ってはいいる。しかしこういった行事を通して見るインドの姿は、インドの一部を切り取ったものに過ぎず、インドの本質に触れたとはなかなか言い難い。子ども達の安全を確保しながらインドを体験するという、ある意味相反する作用を同時に考えることの難しさがある。ただ、宿泊行事や交流行事を持った後、子ども達が確実に成長している姿を見ることができる。取り組む時間は多くはないが、現地理解のために凝縮された時間は、大きな成果を子ども達にもたらしている。



学習発表会でインドダンスを披露

5. 日本人学校に通う子ども達の姿

現在、世界中に在外教育施設に在籍する子ども達がいるが、特に小規模校に通う子ども達には共通する何かがあるように思う。それは、日本から遠く離れ、厳しい状況の中で暮らしている子ども達同士が感じるある種の「絆」のようなものである。それを本校のある児童は「家族みたい」と表現した。

兄弟姉妹が在籍する関係で、子ども達は互いを「名前」で呼び合う。少人数であるがゆえ、子ども達も教員も互いが互いを理解し、認め合う関係が自然と構築される。学級担任は位置づけられてはいいるが、全教職員が全児童生徒の担任であるかのような関わりとなる。こうした関係性を重視し、指導に生かせる場として、本校では「学校行事」を大変重要視している。

ムンバイ日本人学校においては、現地の人々との交流行事である「グルモハル祭（7月）」、「学習発表会（10



グルモハル祭

が見られる。

また各行事において、特に上級生は「司会」などの「役」が常に与えられ、頻繁に「挨拶」が求められる。上級生ばかりではない。年に一度行われる「スピーチ発表会」では、保護者などの大勢の大人が見守る中、小学1年生から自分の意見を発表する。低学年の子どもには少々負担が大ききようにも思われるが、実際の発表の場では、年齢に関係なく全員が原稿も見ずに堂々と自分の意見を述べる。こうして本校に編入学する前に人前で話すのが苦手だった児童生徒も、場を重ねることで自信がつき、ついには堂々とした態度で発表できるようになる。まさに「役」が「人」を創る学校なのである。

学習面においても、少人数であることの利点が大いに活かされている。授業時間の子ども達は、クラスを組成する人数が1名～10名程度であるため、よく集中して授業を聞いている。宿題などを忘れる子もいない。小学部の算数の時間、基礎計算力を高めるために「百ます計算」に取り組んでいたが、自分自身の記録を少しでも良くするため、本当に熱心に取り組んでいた。授業中は表現力の育成をめざし、どの教科であっても発表を重んじた。1名しかいない学級であれば、教員が聴衆となった。

本校の児童生徒は、概ね学力も高く意欲的であったが、もちろん中にはあまり勉強が得意でない子どももいる。ところが子ども達同士の影響力は絶大だ。例えば1月に行われる「百人一首大会」をめざして、国語の時間を活用して、全員が少しでも多くの歌を覚えるようにしている。すると、まだ6～7歳の子どもが、上の句を読んだだけで札を取れるようになる。周りの子ども達に刺激され、自分もせねば、という気持ちが自然と湧き起こる。

子どもが授業中も答えに窮する場面でも、周りの子ども達はじっとその子が答えが出るのを待つ習慣ができていく。ある日の「歓迎会」での1コマであるが、初めてみんなの前で自己紹介をする場面において小1に編入してきた子が、なかなか言葉を発することができない。待つこと1分、2分…。ようやく「宜しくお願いします」という一言が聞こえたとき、会場から大きな拍手が沸き起こった。ちなみに彼女はその後、百人一首大会（低学年の部）で見事優勝した。

日本人学校、とりわけ小規模校に共通するものは、子どもと教師があたかも1つの「家族」になったような「絆」である。在籍期間中には漠然とは感じているものの、意識することはあまりないのかも知れない。ただ帰国や転地が決まり学校を離れるとき、込み上げてくる思いがある。ある児童は「お別れ会」のとき、こういう言葉でお別れの挨拶を締め括った。

「私は、インドに来る飛行機の中ではずっと泣いていました。でも、帰りの飛行機ではもっと泣くと思います。」

「家族みたいな」学校から見たインドは、やはり深い…。そう実感した3年間であった。